

国土社の創作児童文学 6

ゆう

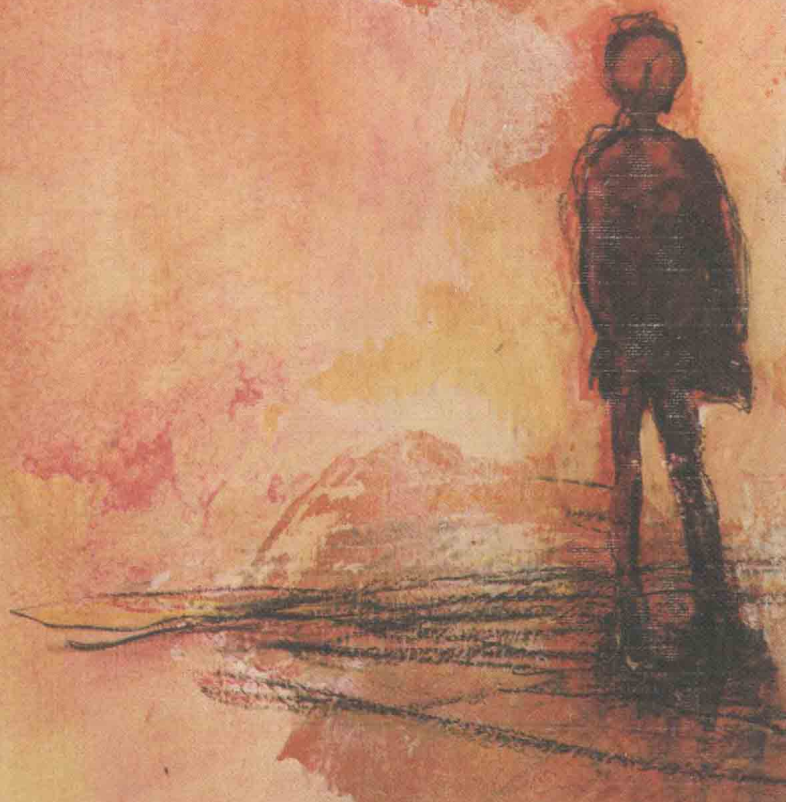
や

き

おく

夕焼けの記憶

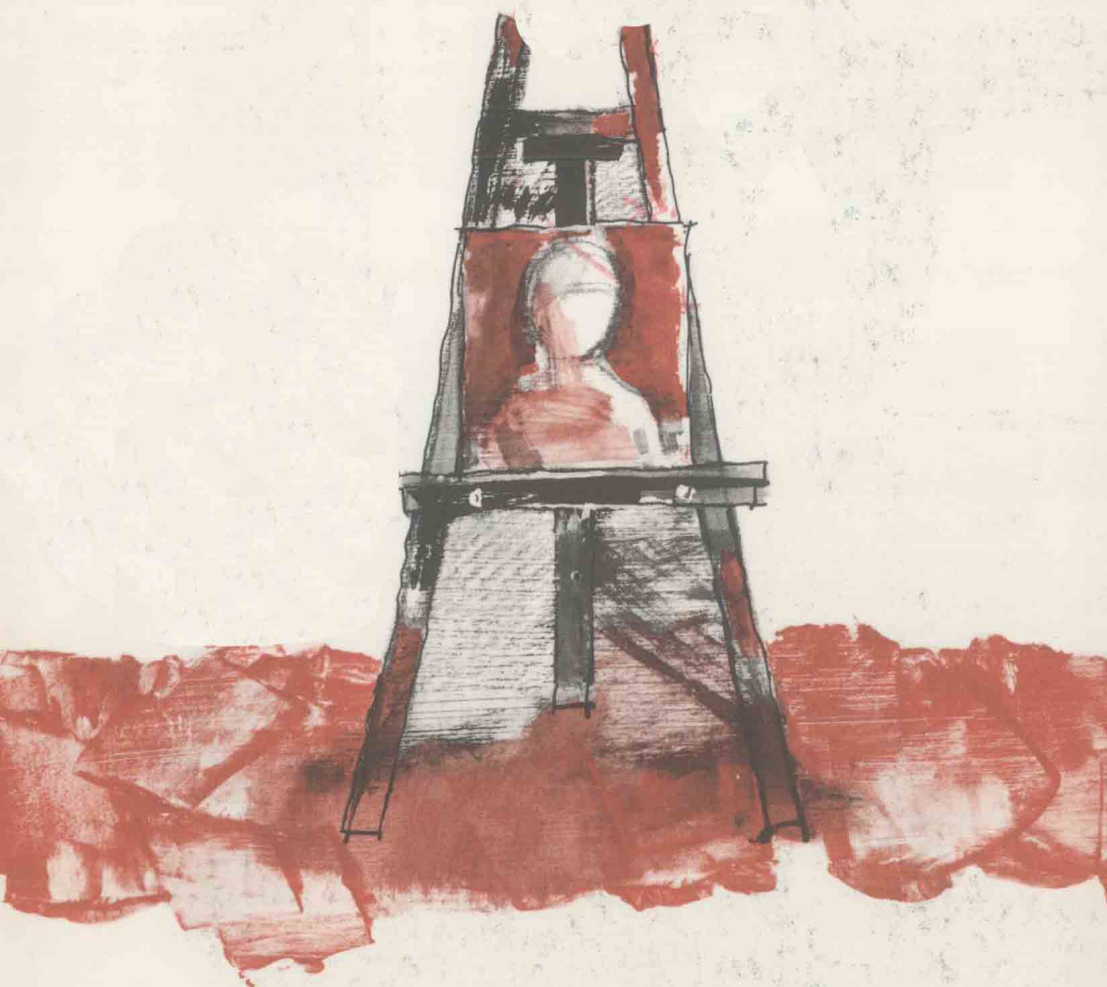
大野允子 作・小坂しげる 絵



国土社の創作児童文学 6

ゆう や き おく
夕焼けの記憶

大野允子 作・小坂しげる 絵



大野允子

夕焼けの記憶

国土社 1973

188p 21cm (国土社の創作児童文学⑥)

基本カード記載例

夕^{ゆう}焼^やけの記^き憶^{おく}

国土社の創作児童文学⑥

初版発行 一九七三年三月二十日

四版発行 一九七七年十二月十日

著者 大野^{おの}允子^{みづこ}

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社厚徳社

発行所 株式会社国土社

112 東京都文京区目白台一―一七―六

電話(九四三)三七二一

振替 東京 六一九〇六三一

落丁・乱丁の本はおとりかえします(検印廃止)

■ もくじ

ゆうや きおく
夕焼けの記憶

一章 ゆみ じようび
由美の土曜日

けん か 2

ちくさが ろう
千草画廊にて 17

二章 おとな しゆうへん
大人たちの周辺

夏の日のこと 32

す きら え
好きでも嫌いな絵 36

へんな かんけい
へんな関係 44

ひ みつ
秘 密 48

三章 ゆうや きおく
夕焼けの記憶

きよし
清はびっこです 64

あたらしい えの く
新しい絵具 74

四章 かお しようじよぞう
顔のない少女像

てだま うた
お手玉の歌 94

かた
肩にかかるもの 102

もうこのままで 122

五章 き み
秋の木の実

へや
白い部屋 138

いのち
光る生命 161

はのお けむり
炎と煙と 176



Sige

一章

由^ゆ美^み
の
土^ど曜^{よう}
日^び

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

けんか

ポプラの梢^{こずえ}がしやらしやら鳴^なっている。

聞^きこえるような、聞^きこえないような、乾^{かわ}いたかすかな音^{おと}だが、小さな葉^はをいっせいにひるがえして白銀^{はくぎん}色^{しよく}に光^{ひか}るとき、やっぱり、しやらしやらと鳴^なっている、しやらしやらと、浅野^{あさの}由美^{ゆみ}の耳^{みみ}には聞^きこえてくる。

○中学^{ちゅうがく}名物^{めいぶつ}のポプラ並木^{なみき}の高い梢^{こずえ}が、風の鈴^{すず}になって、九月^{くがつ}の空^{そら}の中で鳴^なっているのだ。この感じ^{かんじ}、キャンパスの上に画^かけたら、素敵^{すてき}だな……梢^{こずえ}を見^みあげながら由美^{ゆみ}は校庭^{こうてい}にたっている。

その肩^{かた}をぽいっとたたいて、

「きょうも、ひとり？」

と声をかけたのは、同級の田上和江である。

朝からこれで六べんめ、由美には気にさわる質問だった。

「ひとりで悪かったわね！」

といい返したら、やあ、かなわんわー、とばかりからだをくねらせて、和江はきんきら声をあげる。

「ね、ねえ、ほんと、佐々木さんと絶交したいの？ 二Cのもん、みんないうとるけど」

「知つとるんなら、聞くことないでしょ」

「だってえ、気になるもん。親友だった二人が、どうしたのよ」

「関係ないの、ほっといてちょうだい！」

「わっ、もうれつやわあー、うちにまであたることないと思う」

「ただ今、絵の構図を考え中ですの。高周波の雑音をいれないでほしいな」

「帰るわよお、わたしが消えればいいんでしょ！」

「そうなの、さよならー」

おこつて唇をとんがらせた和江が、ご自慢の長い三つ編みの髪を、うしろへはねとばしてかけていく。ふりむいて見なくても由美にはわかっていた。

（佐々木さんと絶交したいの、ほんと？ どうして？ 誰もかれも、おんなじことを聞くんじやから、やんなっちゃうな）

きのうもおととも、いったい何べん聞かれたろう。ほんとよ、佐々木克子やなんか、だいっ嫌い——と答えられたら、すかーつとするはずなのに、由美はそのたびにとぼけて話をそらしてしまふ。人のけんかを、おもしろがって見物されてはかなわない。できのいい克子は敬遠して、野次馬たちはみなおしやべり由美のそばへ現われる、それが、よけいにしやくなのだ。

空の中で、ポプラの梢がふるえているのに、由美の耳にはもうしやらしやらと鳴る音が聞こえない。雑音がはいって、あのときのことを思いだしたからだろうか。

ポプラの青い葉を一枚、拾って由美は校門のほうへ歩いていく。

由美が、佐々木克子と衝突したのは、先週の土曜日、生徒会の役員選挙のあとである。

「市村くんのほんとの気持ち、由美にはわかるもんですか！」

克子の細い目がま新しいナイフのように光っていた。

「市村くん、会長やなんかになりとうはなかったのに、かわいそう」

「へーえ、なにがかわいそうなん？ 最高点で当選したのに」

「だから、かわいそうなのよ。市村くんは責任を感じる。生徒会で頑張ったたら、どうしても勉強のほうだめになる。それだから、ちょっとましなものは、会長にはならんわあ」

「点とり虫の利己主義者には生徒会長はつとまらん。だからよ、彼にでももらったんじゃないの。うちのクラスで、いちばん頼もしいやつだと思っただから推せんしたのに、克子がもんくつけるなんて、おかしいじゃん」

「……もんくじゃない。由美が、H・Rのとき、市村くんって発言せんかったら、よかつたのにな、とつい思ってたから」

「それ、あんたの意見でしょ。市村くんとは関係ないね。彼はどうと受けてたつた、演説だって拔群よ、内容があったわ。受験勉強なら、三年になってやれる、心配しなさんな。彼なら、すすいとH高へパスしますつたら！」

「由美のばか！ なんも知っちゃあおらんのじゃから」

ナイフの目に冷たい炎がちらちらする。

「どうせわたしは、あんたよりばかです」

ふてくされて由美はいい返した。

「市村正規について、特別な情報は知りませんことよ。C組のクラスメート、家はS新開の克子さんのお近くだということ、それだけさ。何かあるのなら、それを知っとるんなら、教えてくれたらいいでしょ」

「もうだめ。今から教えたって、選挙のやりなおしはできません。それに……」

いいかけて克子は横をむく。おおよそ美人とはいえないいちまちました目鼻だちの丸顔に、感情の高ふりがふきあげてきて、言葉にできないいらだちが唇をふるわせていた。

「へんな克子………」

形のいい鼻にしわをよせて、ついと由美も横をむく。きょうの克子とはにかくへんだ。

こんなに感情をむきだしにした克子を見るのは、はじめてである。

由美とは小学校時代からの友人だが、おこりっぽい由美のなだめ役は、きまつて克子だった。虫のいどころが悪いと、克子にまでくつかかって、泣かしたものだ。算数の宿題がどうしても解けないときは、克子ひとりわかってひきょうだ、人が困っているときには助けしてくれるべきだと、へりくつをこねた。克子の詩へダムサイトの月見草が学校新聞に載せられたときは、いなかに親類のあるものはいいな、月見草を見たら誰でも詩がつく

れるようなことをいって、由美はぼやいた。

ダムサイトの月見草は

金色のちようちんです

あしたは町へ帰るといふ私を

だまって送る

夜のちようちんです

の一節は、好きだからおぼえてしまった。

「……ねえ、克子」

思いなおして話しかけたのに、克子は無言のまま背をむける。

「あほらしいわあ、もうすんだことじゃのに……市村くんのこと、かっかすることないと思うなあ」

すると克子は両手を耳にあてて、まるでだっ子のように首を左右にふった。

「ほっといて！ 市村くんのこと、あんたにはどうせわからんのじゃから！」

激しい言葉が由美の胸に突きささる。すぐにひきぬいて投げ返せばよかったのに、中庭

の丸く刈りこんだモクセイの木のそばへ克子を残したまま、だまって由美はかけだしていた。

あれから、ちょうど一週間になる。

友情なんて、粉雪でつくった玉のように、すぐにとけてしまうのだ。冷えびえした感触だけが、ほんのいつとき、掌に残って、消えてしまった雪の玉をちよっぴり惜しいと思わせるだけなのだ。

歩道橋の手すりに右の掌をのせて、ゆっくり由美はのぼっていく。この歩道橋の上で、
 へ藁椅子なおしの女について克子とやりあったのは、たしか二年になってまもなくのことだった。性格の違いが、ふたりの間に、見えない溝をすこしずつ掘りはじめていたのかもしれない。ほっておいたら、溝は深くなるばかりだ。今、克子が手をのぼしてくれたら、その手を握って、溝を飛びこえることができるかもしれない。だが、このあいだのけんまぐでは、とてもだめだ。由美のほうから手をだしても、克子はきつとそっぽをむくだろう。そんな屈辱には耐えられない。あの藁椅子なおしの女のように、ひたむきに報われない愛を捧げつくすなどというげいとうは、由美の性にはあわない。

「好かんわあ、みじめすぎるもん」

といったら、すぐに克子は反論した。

「わたしは好きよっ！」

パンク寸前の重いかばんを足もとへおろして、克子はうつとりと空を見あげた。

「……人生には、あんなことが、いっぱいあるんだと思う。胸がきゅーんと痛くなった」

「胸が、キューンとなの？」

あははーと、まるで男の子のように由美は笑った。大口をあけて笑っても、由美の白いくつきりした顔は美しい。

「もし、薬椅子なおしの女が美人じゃったら、あんなにばかにされんでもよかったと思う。そこんところが、びーんとくるの……わたしは美人じゃないから」

克子らしくない皮肉っぽいいいかただ。

「あれはフランスの小説じゃんか、現実には、そんな人はおりませんよーだッ」

「美人は心が冷めたいんじゃないね」

「それ、どういう意味？」

「わかつとるくせに、自分のことよー！」

「ふアー、びっくりさせんといて。ミス化石のことでしょ」

「わたしは、ミス化石が嫌いじゃないわ。山之上先生の心は凍りついて、化石になったんだと悪口をいわれとるけど、なんか理由があるはず……ミス化石の過去には、悲しいなんかあったんじゃないと思う」

「やれやれまたはじまった、克子、空想の翼をひろげる——悲しい過去かあー！ あんたの主義だと、だいたいにおいて、美人はとくをすることが多いんでしょ？ ミス化石は例外なん？」

「ハイ・ミスじゃから不幸だとは断定できんわ。山之上先生は、みんながいうほど冷たい人じゃない。この小説が好きな人は、薬椅子なおしの女の心が、わかる人じゃないと思う。いい人なんだわ」

「じゃ、わたしは、いい人じゃないってわけ。へーんだッ」

由美はおもしろくなかった。

ミス化石というのは、O中でも古株の国語教師のあだ名である。色白の細っそりした顔は能面のように無表情で、笑った顔を見た生徒はひとりもない、という伝説がまことしやかに継承されている。そのミス化石が国語の担任になったのは、由美たちが二年になっ

てからである。教科書といっしよにいつも文庫本を一冊もって、ミス化石は教室へ現われる。時間が残ると、文庫本をひろげて短編小説を読んでくれる。

モーパッサンの作品《薬椅子なおしの女》は、十一歳の少女が、金を落として泣いてゐる村の男の子に、恋をするとところからはじまっていた。親子三人、馬車にのって村から村へ、薬椅子なおしの旅をつづける貧しいジプシーの娘である。

村はずれに馬車をとめると、家いえをまわって注文をとり、いたんだ薬椅子のシートを編みなおした新しいのととりかえるのが両親の仕事、少女は編みあがった薬のシートを家へ届けて、わずかな手間賃を受けとってくる。親切なかみさんが、つかいのだちに銅貨を一枚くれたりすると、少女はだいにしまっておいた。

はじめて、薬屋の息子シューケに会ったとき、少女はへそくりを七スウもっていた。わけを聞くと、惜しげもなくその七スウを、シューケの手にのせる。涙をふいて金を受けとってくれたのが嬉しくて、少女は思わず男の子にキスをした。

子どもたちの遊びを遠くのほうから見てるだけで、犬でも追っぱらうように、しっしっ、あっちへいけ、といわれてきたシラミだらけのぼろを着たジプシーの娘には、生まれてはじめての経験だった。

孤独な少女の心に、シューケの姿が焼きついて離れなくなった。

少女はせつせとへそくりをためた。

その年は、学校の裏でビー玉をしているシューケをみつけると、飛んでいってキスをした。男の子は目を丸くして、もらったばかりの三フランを眺めていた。

つぎの年も、またつぎの年も、少女と男の子のきみような出会いはずづいた。へそくりの少ない年は、会うのがつらかった。

五フラン金貨のときは、ほおを輝かせてシューケは笑った。

やがて男の子は少年になり、町の中学の寄宿舎へはいった。少年に会うためには、ちょうど夏休みにその村へやってこなければならぬ。両親に感づかれないように馬車のコースをかえるのに、娘は苦労した。

二年ぶりに見るシューケは、金ボタンの制服を着てまぶしいほどのかわりようだった。だが娘に気づくと顔をそけむて、いってしまった。心傷つけられたジプシーの娘は、薬屋のガラス戸のむこうに、何度か少年の姿を見ただけで、村を離れていった。

それから、悲しいことばかりがつづいた。両親が死ぬと、娘は古びた馬車と馬と老犬を相続して、薬椅子なおしの女になった。

村の薬屋には、白いうわっぱり姿のシューケがいつもすわっていた。

女は、一年中の常備薬を、シューケの店で買うことにした。薬とひきかえに、いくらかの代金を彼に渡すことができるからだ、子どものころの、あのときのように……。

ある年、薬椅子なおしの女は、薬屋の店からシューケとその妻が手を組んででてくるのを見た。その夜、女は役場の前の池に身を投げたが、助けられて、皮肉にもシューケの店へ運びこまれる。薬剤師のシューケは、女のかからだをこすって暖め、気つけ薬を飲ませると、くだらんまねをするんじゃないぞ、ばかなやつだ——と叱った。叱られても、薬椅子なおしの女には嬉しい言葉だった。

それから何十年たったろう……。薬椅子なおしの女は思い出の村へ馬車をとめて、死んだ。今までにためた全財産二千三百二十七フランを、薬屋のシューケに渡してほしいというのが、遺言だった。この金を見たら、きつと、死んだ自分のことを思いだしてくれるだろう、五十五年間愛しつづけた男への、たった一つの願いであった。

シューケは、村の牧師から薬椅子なおしの婆さんが死んだのを聞くと、こじき女めつ、とはきだした。あんな女に愛されていたことは、めいわくだ、けがらわしい、と妻といっしょになってのしった。そのくせ、薬椅子なおしの女が血のにじむような思いでためた